



教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1997 発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL 0797-31-3452・FAX 0797-31-3448

〈十字架の道行き〉

十字架は永遠の

生命を与える

☆ 今日、私たちは聖金曜日
の十字架の秘義を黙想す
るため、ここに集まりました。

「見よ、キリストの十字架。と
もにあげよう。」

このコロセウム(円形競技
場)で主を賛美しましょう。こ
こは信仰における祖先たちが、
殉教に至るまでキリストの私た
ちへの愛を証した場所です。
古代ローマのこの地に立つと、
先年司牧訪問したリトアニアの
「十字架の丘」を思い出しま
す。はるかローマ時代ならぬ現
代の、つい前世紀のもう一つの
コロセウムに心を引かれます。
リトアニアを訪問する前に、
私は福音宣教の二本の道に思い

を馳せました。一つはローマを
発して北、東、西へ伸びる道で
あり、もう一つはコンスタチ
ノーブル、オリエント教会から
発する道です。二つの道はちよ
うどバルト海沿岸のリトアニア
とロシアの間で合流しています。

☆ (…)ロシアにも、シベ
リアにも無数の現代のコ
ロセウムが、「十字架の丘」が
あります。東方の兄弟姉妹の皆
さん。愛する皆さん、私たちは
ここローマの、「十字架の丘」
の、数多くの絶滅キャンプの殉
教者たちのもとで、一つです。
人々を死に追いやるものに対抗
して、一つにならずにはいられ
ません。

私たちは十字架の真理につい
て語らずにはいられません。な
ぜ?それは、今日の世界が十字
架の力をそごうとしているから
です。数世紀に渡って広がり、
十字架の力をくじこうとする反
キリスト教の伝統が、「人間は
十字架にもとづくものではない、
十字架を信じたり希望を置
いたりするのは無用なことだ」
と言い聞かせようとします。人
間は人間に過ぎず、神が存在し
ないかのように生きなければな
らない、というわけです。

☆ 愛する皆さん、私たちは
共通の課題を担っています。
西も東も共に、十字架の力
をそいではならない!と言わな
ければなりません。キリストの
十字架が力をなくせば人間は根
無し草になり、将来の希望もな
く破滅するしかありません。
これは終わりつつある二十世
紀の叫びです。ローマの、モス
クワの、コンスタンチノーブル

兄弟姉妹の皆さん。
一年の中でも特にユニークな
この聖週間は、世界史上でも最
もユニークな期間です。この一
週間は、神の御子が全く私たち
と同じものとなり、十字架の死
に至るまで従順を貫かれた時で
す。御子の受難と死と復活の秘
義を今週、特に聖木曜日、聖金
曜日、聖土曜日という聖なる三
日間に私たちも追体験します。

過越しの秘義をふたたび

の叫びです。全キリスト教世
界、アメリカ、アフリカ、アジ
アの全ての人の叫びです。それ
は新しい福音宣教の叫びです。
イエズスは言われました。私
を迫害する人はあなたたちをも
迫害するだろう。私に耳を傾け
る人は私の言葉を受け入れ、あ
なたたちの言うことをも受け入
れるだろう。受け入れる他に道
はありません。永遠の生命の言
葉を持つ者は、イエズスとその
十字架以外にないのですから。
古代ローマのコロセウムでの
この十字架の道行きの終わり
に、私たちは他にもある全ての
コロセウムを思い起こし、愛と

聖木曜日、教会はキリストのへ
りくだった行ないを再現しま
す。主は使徒たちの足を洗い、
使徒と私たちの心を聖体の制定
へと向けさせられました。聖体
においては、神の子イエズスご
自身が私たちのために食物であ
るパンとなって存在します。主
は御体と御血で私たちを養って
くださるのです。
この秘義は私たちをキリスト

☆ 十字架の下にたたずみ、
私たち皆を我が子のように
に抱いてくださる御母に、私た
ち自身と全教会と全ての人をゆ
だねます。御母の愛のうちに、
私たちがヨハネのように、キリ
ストへの信仰と教会の交わりと
一致の力を感じる事ができま
す。御父と御子と聖霊に、キリ
ストの十字架を感謝します。
イエズス・キリストに賛美!
皆さん、よい復活祭を!
(九四・四・一、ローマのコロ
セウムにて、恒例の十字架の道
行きの際のお話)

信仰と共通の希望のうちに挨拶
を送りたいと思います。

信者として生きさせます。私たちは「キリストの運び手」、「神の運び手」です。それは特に、聖木曜日に高間での最後の晩餐の席で定められた、聖体の秘跡の力によるものです。

教会は細心の注意をもって主との超越しの出会いに備えます。全ての秘跡に使われる聖香油が聖別されます。聖木曜日は聖体のみならず、教会に生命を与える全ての秘跡の制定の日でもあります。キリストは全ての

秘跡の中で働き、私たちがキリストの生命に生きることができるよう、苦しみ、よみがえっておられるからです。

聖金曜日はご受難の日です。十字架が大きな位置を占めます。「見よ、世の救いのかかる十字架を。」十字架の木、この十字架の上で、イエズスは世を救われました。十字架の上でヤーウエのしもべとして世の罪を背負い、それらの罪と共に、永遠のいけにえ・世々に至るま

で聖霊を通して御父に捧げられる霊的ないけにえとして、御父に認められました。こうしてイエズスは、贖い主として生ける神の神殿に入りました。ヘブライ人への手紙にはこの秘義が説かれていきます。(…) 私たちも、十字架にかけられたキリストを黙想しましょう。(…)

どうか皆さん、ローマ市民も巡礼者の方々も、聖ペトロ大聖堂で十字架を賛美し、コロセウムで十字架の道行きに参加してください。

聖土曜日は復活の前夜です。イエズスは墓に葬られ、全世界は墓が開いて主が死に打ち勝ち、出てこられるのを待ち受けています。復活した主が来られる。「よみがえられた」の聲が、イエズスの葬られた墓から響き渡ります。こうしてご復活の日曜日・復活したキリストの過越しの日曜日が始まるのです。過越しとは通り過ぎることですが、私たちがキリストにお

キリストとご自身と 創立のカルスマへの忠実

バチカン公会議を振り返る 10

第二バチカン公会議についての考察を続けていますが、本日は公会議の教父たちが奉獻生活に関して述べた文書「修道生活の刷新・適応に関する教令」について考えたいと思います。

「教会憲章」の中で公会議は、奉獻生活が決して結婚や在俗の事柄に対する敬意を欠くものではなく、キリストからの特別な呼びかけであることを説いています。洗礼を受けた者が自ら選んでもっと主に近く歩む生活に入るよう招くのは、キリス

トご自身です。(教会憲章44番参照)それによって、神が絶対であるという事実を雄弁に語るのです。まことにこれは、全てのキリスト信者のものである洗礼と堅信の奉獻を深める、新たな奉獻です。この奉獻によって、召された人は新たな方法で「全く」主のものとなり、兄弟姉妹への愛のため無条件に仕える者となります。そんな犠牲を払うのは、決して愛が不足しているからではありません。逆に、犠牲は愛が溢れているしるしなのです。奉獻生活を送る人

は、この世の価値を認めますが、それらが絶対のものではないことを証明するために召されています。実にキリストこそは究極の価値であり、すべての目的です。これらのしるしと終末的な預言をもって、奉獻生活は教会の秘義に深く根ざしています。それは教会の位階構造には組み入れられていませんが、「教会の生命と聖性に」(教会憲章44番)属しています。

「修道生活の刷新・適応に関する教令」で公会議の教父たちは、奉獻生活が時代の必要にかなう形で発展しつつも、つねに福音に完全な忠実を保つよう心掛けました。

この点、公会議以来、賞賛に価する努力が重ねられてきました。奉獻生活に関する

のしるしを注意深く読み取り、福音の効果的な証人となるよう、適切に勧められています。(同3番参照)

皆さん、信仰に満ちた処女マリアに願いましよ

説教・講話・書簡等の抄記

復活祭のよろこびは 死と罪に対する勝利の喜び

「恐れることはない。」
(マルコ16・6)

マゲダラのマリアとヤコボの母マリアとサロメは、イエズスが葬られた墓の入り口でこの言葉を聞きました。墓に着いた三人は、入り口を塞いでいた石が転がされ、墓が空っぽになっていくことに気づきました。恐れと驚きに捕われていると、墓の底から声が聞こえてきたので、三人はいよいよ恐れしました。

「あなたたちは十字架につけられたナザレトのイエズスを捜しているけれども、イエズスはおもひがえり、ここにはありません。見よ、ここに納められていた。へ主は皆に先立ってガラヤに行かれる。かつて話されたとおりにこうで会える」と弟子たちとベトロに知らせに行け。」(マルコ16・6-7) 墓を出た婦人たちはおののいて逃げ去り、怖かったのを見て逃げる誰にも話ませんでした。

あずかるうとしています。福音史家マルコが書き記した出来事は、簡潔ですが実に驚嘆すべきものです。

復活徹夜祭の典礼は、自然の力についても語っています。その時起こった出来事を示すためのしるしとして、それについて触れておくべきでしょう。キリストが墓を離れたその時、大地震は震え動きました。大地震が起こって墓の石が転がりました。

(マテオ28・2参照)

今夜、典礼では火が用いられます。火は不思議な力を秘めています。祝福されていると同時に、破壊にもつながる力です。

火は道すがらの全てのものを呑み尽くしますが、人間に益をもたらします。暖を取るために火が必要です。火は闇を追い払ってあたりを明るく照らしめます。今夜、教会は火を灯して明かりを取り、「キリストの光」と唱えながら、会衆と共に聖堂に入場します。炎の輝きは復活のシンボルとなります。

今夜の典礼は、水の持つ力に

最も注目します。水は死のしるしともなります。聖パウロによれば、水はキリストの死のシンボル(ローマ6・3-4参照)であり、この死を通過するためには水をくぐらなければなりません。キリストの死における洗礼は、汚れを洗い落とすことにとどまりません。もつとすばらしいことに、生命を与えてくれます。泉からわき出る水は、疲れた体を元気づけ、力を回復させます。そこで水は、洗礼を通じての再生の秘跡的しるしとなりました。この秘跡によって、教会は今日もキリストの復活にあずかります。

今夜洗礼を受ける兄弟姉妹の

「キリストを荒野へ導いた聖霊は、私たちにも誘惑に耐え、神の子の自由を生きたために必要な恩寵を与えてくださる。」「イエズスは単に外面的な従順や生活の改善のみを求めておられるのではない。心からの回心と、御父への確固たる忠誠を望まれる。四旬節に当たり、私たちがエルサレムでの十字架の上のいけにえに至るまでつ

皆さん、あなたたちはこの秘跡を通してキリストの復活にあずかるのです。新しい生命に入ろうとする皆さんを、ローマ司教は心からお迎えします。また皆さんの祖国であるグアテマラ、香港、イタリア、日本、韓国、ペルー、フィリピン、ポルトガル、スロバキア、スペイン、イスにも挨拶を送ります。

新しい生命は、いつでも喜びのみなものです。教会の喜びは、復活を宣言する最初の言葉に表われています。「よろこべ！」それは喜びの叫びです。

今晩の喜びは、墓での婦人たちの恐れをはるかに上回りま

す。それは罪と死に勝った喜びです。教会はためらうことなく歌います。「ああ、幸いな罪よ。」この夜、おまえは贖い主に出会ったから、主の死によっておまえは打ち負かされたから。キリストは復活し、アダムの子ら全員に生命を取り戻してください。

そして今もお、このすばらしい復活徹夜祭の夜、教会は私たち全員を喜びに招きます。喜びましょう。キリストにおいて生命は死にまさり、救いは罪をしのいだのですから。

あなたたちに大きな喜びを伝える。アレルヤ! (九四・四・二、聖土曜日のみサ)

き従うよう呼んでおられる。」(2月12日、一般謁見の時のお話。)

親密な交わりに入ることを意味します。：回心とは、あらためて神を見い出すことなので「神が望みます! 神は私たちの内に清い心をつくり、

灰の水曜日当たったのお話 (抜粋)

「灰は人間のもろさと、死への従属を表わしています。贖い

確かな霊を与えたいのです。四旬節の始まりに当たり、私たちは神の恩寵に心を開いて、復活祭までの回心の旅路を歩みたいと思います。」(2月13日、灰の水曜日のみサでの説教。)

説教・講話・書簡等の抄訳

キリストの恩寵と 聖母の無原罪

聖母マリアと教会・シリーズ9

1 マリアが受胎の瞬間から

完全な聖性を受けていたという教えは、西方では多少の抵抗がないわけではありませんでした。罪の普遍性や原罪についての聖パウロのコメントがあり、聖アウグスチヌスもそれを取り上げて、説得力ある説明をほどこしています。

この偉大な教会博士が、マリアは全く聖なる御子の母という身分に相應しい、完璧な清さと並外れた聖性を備えていたことに気づかなかつたはずはありません。そこでペラジウスの説とは反対に、アウグスチヌスはマリアの聖性が例外的な恩寵の賜物であることを強調し、「祝された処女マリアは例外と考えるべきでしょう。主の名誉のために、私はマリアを罪と結びつけて考えたくはありません。マリアがより優れた恩寵を受けたのは、罪に勝つ完全な勝利のためであり、彼女は明らかに罪の全くない御方を見ごもり、生んだのではありませんか」(「自然と恩寵について」42番)と述べ

2 アウグスチヌスは、主の御母

としてのこの上ない尊厳のゆえにマリアは完全な聖性を持ち、個人的な罪もなかつたと強調しています。とは言え、受胎の瞬間から一切の罪を免れていたとする主張と、原罪の普遍性及び全てアダムの子らは贖いの必要ありという教えとの間にどう折り合いをつければよいのか、彼にはわかりませんでした。後にこの問題は、教会の信仰によって洞察力に富んだ理解に達し、マリアがどのようにして受胎の瞬間からキリストの贖いの恩恵にあずかっていたのかを説明できるようになります。

ドゥンス・スコトゥス、
反対説をしりぞける

2

九世紀になって、マリアの御宿りの祝日がまず南イタリアのナポリに、次いでイングランドという具合に西方にもたらされました。

一一二八年頃、カンタベリー
の修道士イードマーは、はじめ

て無原罪の御宿りについての論文をあらわして「純朴で最も敬神の念篤い人々の間で」(Tract. de conc. B.M.V. 12)特に喜ばれているこの祝日が今まで顧みられず、禁じられていたことに不満を述べました。祝日の復活を願う敬虔な修道士は、人間の世代を経て原罪が伝わるという教えに基づいた、聖アウグスチヌスによる無原罪の特権反対論をしりぞけました。彼は手頃なイメージとして、「いがの下で実り、育ち、形成されるが決していがに刺されることのない」(Tract. 10)栗の実を例に取りました。それ自体は原罪を伝えずにはいられない世代間の行為という栗のいがの下で、マリアは「明らかにそうすることができ、それをお望みであり、そうしようと考えたのならそうされたいに違いない」(前掲書)神の明白なご意志によって全ての汚れから守られたのである、と彼は論じました。

は罪の状態にある者を解放することだからである。

3

十二世紀のある神学者たち、スコトゥスは、マリアの無原罪の御宿りへの反対論を克服する鍵を見い出しました。完全な仲介者であるキリストは、まさしくマリアのために最高の取り次ぎをし、マリアを原罪から遠ざけた、と彼は考えたので

の御母は生を受けた瞬間から完全に聖なる方であるはずだという基本的な信仰の洞察に急ぎ立てられるようにして、定まったのです。

4

マリアに与えられた例外的な特権が強調する事柄に気づかぬ人はいないでしょう。キリストの贖いのわざは、私たちが罪から解放することに留まりません。罪から守ってもらうのです。マリアの例に見られるように、この「守つてくれる」という次元は、人を罪から解放するキリストの贖いの仲介力が、罪の影響に打ち勝つ恩寵と力をも人間に与えてくれることを示しています。

恩寵の効果

こうしてマリアの無原罪の御宿りという教義は、キリストの贖いの恩寵が人間性に与える影響を考える上で、輝かしい光を与えてくれるものとなりました。

信者はキリストが最初に贖われた方マリアを仰ぎ見ます。マリアは一瞬たりとも罪と悪の力に屈したことがなく、聖性の完全な模範・範型(教会憲章65番参照)として、主の恩寵の助けにより、信者たちが生涯をかけて到達すべき目標です。

(九六・六・五)

◆ 皆さん、教会が勧めてい
る四旬節期間の償いの行
為の中には、体が必要とする以
上の食物を特別に控えること、
すなわち断食が含まれていま
す。伝統的な償いの形式にも
ちゃんと意味があるわけ
で、食べ物が満ち足
りたあげく食べ過ぎて
病気になる人々がいる
ような地域では、この
伝統をこそ見直すべき
でしょう。

断食は霊魂の治療に役立つ

際、悔い改めのしるしに断食す
ることで、神に聞き従うための
内的努力が容易になります。そ
れは、荒野で四十日間断食し
たイエズスがサタンに答えた言
葉を再確認することなのです。

償いの行為としての断食は、
治療のためのダイエツトとは明
らかにかなり違います。それ
自体は霊魂にとっての治療であ
ると考えてもいいでしょう。実

「人はパンだけで生きるのでは
ない。神の口から出るすべての
言葉によって生きる。」(マテ
オ4・4)

◆ 今日、特に豊かな社会で
福音書のこの言葉を理解

するのは難しいでしょう。必要
を満たすことに代わって消費主
義がたえず新しい物を生み、し
ばしば行き過ぎた活動主義をひ
き起こしています。何もかも必
要で、急を要するかのようで
す。人はしばらく胸に手を
当てて考える時間を見つけ
ようとすらしません。
聖アウグスチヌスの警告
は現代にぴったり当てはま
ります。「自分自身に戻り
なさい。」そう、自分を見出し
なければ、もう一度われに返る
ことです。霊的生活のみなら
ず、個人や家庭、社会生活上の
バランスそのものが危うくなっ
ています。

償いとしての断食には、内的
生活を取り戻すための手助けと
いう意味があります。食物を節
制するための努力は、他にも不
必要なものは控えるという態度
につながり、霊的生活の大きな
助けとなります。節制と沈黙
想と祈りは、切っても切れない
関係にあります。
この原則は、マスメディアに
びったり当てはまりそうです。
マスメディアの有用性について
は疑問の余地はありませんが、
それが私たちの「主人」となっ
てしまつてはなりません。何と
多くの家庭で、テレビが家族の
会話に取って代わってしまつて
いることでしょう。このような

所での「断食」は、黙想と祈り
にもっと時間を割くためにも、
人間関係を育てるためにも好都
合と言えるでしょう。
◆ 兄弟姉妹の皆さん、祝さ
れた処女を見習いましょ
う。聖母が生涯に起こったでき
ごとを胸に収めて考えていたこ
とを福音は伝えています。(ル
カ2・19参照) それらの中に、
神のご計画を読み取るうとして
いたのです。マリアは私たち皆
の模範です。物にとらわれた心
を解放し、主との出会いに備え
て魂を強めてくれる「霊的な断
食」の秘訣を教えてください。
う、聖母に願いまししょう。
(九六・三・十)

結婚生活は聖性への道

教会シリーズ 41

1 これまで教会の中での女
性の役割の大切さを強調
してきました。確かに男性の仕
事も大切です。教会が使命を遂
行するためには双方の協力が必
要です。この協力がはつきりと
示される場が結婚生活、「人間
の社会的次元の、第一の基礎的
な表われ」(「信徒の召命と使
命」40番)である家庭です。

第二バチカン公会議は「生活
の仕方と職務はさまざまである
が、聖性は一つである」と述べ
て、結婚生活は聖性の道である
と教えています。「キリスト信
者の夫婦と親は、その固有の道
を歩みながら、忠実な愛をもつ
て、恩寵の助けのもとに生涯互
いに助け合い、神から受けた子
供たちにキリスト教の教理と福

音的諸徳を愛をもって教え込ま
なければならぬ。こうして彼
らは、不屈の寛大な愛の模範を
全てのの人に示し、兄弟的な愛の
交わりを建設し、母なる教会の
豊かさの証人ならびに協力者と
なって、キリストが自分の花嫁
を愛して自分をそのために渡し
た愛のしるしとなり、その愛に
あずかる者となる。」(教会憲
章41番)このように、夫婦と家
庭が歩むべき道を二つの観点か
らとらえることができます。忠
実な愛のうちに一致することに
よって聖性を目指す道と、キリ
スト信者として子供を育てなが

ら聖性を目指す道です。今回は
キリスト信者の夫婦、つまりほ
とんどの信徒が歩むべき聖性の
道について考えましょう。とて
も大切な道ですが、社会全体に
まんえんする快樂主義にあおら
れたある種の知的傾向のため、
今日とても動揺しています。
結婚は教会への
キリストの愛のしるし

2 結婚は聖性の道です。結
婚によって夫婦は「キリ
ストが自分の花嫁を愛して自分
をそのために渡した愛のしるし
となり、その愛にあずかる者と
なる」と公会議は教えていま
す。
教会の見解によれば、キリス
トの愛が夫婦を結ぶ愛の源であ
り土台です。これこそ真の夫婦
愛であり、単なる自然の衝動に
従うものではないことを強調し
ています。今日では性の問題を
混乱させるまでに取り上げられ
ています。確かに性生活も真の
価値を備えています。軽んじる
ことはできません。しかし、結
婚生活の基盤としては限界があ
り、不十分です。結婚生活はそ

不変の教え

の本質から言って、全人格的な参与を必要とします。心理学や哲学も愛に関してはこの点で同意見です。キリスト教の教えも二人を結ぶ愛の質を強調し、その愛を秘跡によって恩寵のレベルまで、神の愛にあずかるレベルにまで高め、それに光を投じています。聖パウロはキリストと教会について述べる中で、結婚のことを「この奥義は偉大なものである」(エフェゾ5・32)と語っています。キリスト信者にとって、神学が教えるこの奥義が結婚と夫婦愛と性の倫理の根底をなしているのです。「夫よ、キリストが教会を愛し、そのために命を与えられたように、あなたたちも妻を愛せよ。」(エフェゾ5・25) 恩寵と秘跡的なきずなによって、夫婦の生活は花婿であるキリストの愛のしるし、キリストの愛への参与として信者夫婦の聖性の道となると共に、教会を生き生きとした愛の共同体(これが教会の特徴です)として奮い立たせる起爆剤となります。「夫婦は…兄弟的な愛の交わりを建設し…」(教会憲章41番)と公會議が述べている通りです。

3 公會議はキリスト信者夫婦のこのような崇高な愛の必要性を説明しています。夫婦は互いに助け合わなければならぬと明言して、その愛は自己を忘れ他を愛する愛であることを強調しています。夫婦が互いに助け合い、寛大に献身するところにその愛が表わされます。公會議は、「生涯を通した忠実な愛」と表現して、花婿キリストの絶対的な忠実に倣うよう呼びかけています。特に現代社会の大きな不幸の一つである離婚、夫婦自身と子供に深刻な結果を及ぼす離婚が増え続けている中で、この呼びかけは大切です。離婚によって約束とくずすが破られ、夫と妻は互いに深く傷つき、子供たちも傷つきます。両親の離別によってどんなに多くの子供が苦しんでいることでしょう。イエズス・キリストは絶対に変わることはない愛で信者の夫婦に忠実を守る力を与え、今日かくも広がっている別離への誘惑に抵抗できるようにしてくださることを、繰り返し言わなければなりません。

4 教会の花婿キリストの愛は、贖いの愛です。キリスト信者の夫婦の愛は、贖いのみわざに積極的にあずかる愛であることを心にためましょう。贖いは十字架につながっています。それを考えれば、夫婦の生活にはどうしても免れ得ない試練があることを認め理解することができまます。それは神のご計画では二人の愛を強め結婚生活に大きな喜びをもたらすためなのです。イエズス・キリストは結婚生活を送る者に地上の天国を約束せず、今でも多くの信者の夫婦が経験し証明しているように、困難と苦勞を通して二人のきずなを強め、さらに大きな喜びに向かって旅路を進む機会と召命をお与えになります。

5 母性について述べたように、出産を通して結婚生活を聖化します。夫婦の愛が二人だけのものにとどまることなく、衝動や自然の法に従って新たな生命に開いているなら、神の恩寵の助けによって聖化をもたらす尊い愛徳を実行することになり、それによって夫婦は教会の成長に貢献しています。同じことが教育という仕事についても起こります。それは出産に続く務めです。第二バチカン公會議が述べているように、キリスト信者の夫婦は「子供たちにキリスト教の教理と福音的諸徳を…教え込まなければならぬ。」(教会憲章41番) これが邪魔者扱いされることすらあります。しかし彼らの存在は、深い連帯感に支えられて人間に相応しい社会、全ての人、最も弱い人々をも尊重する社会を築く助けとなります。

2・9 第5回世界病者の日に寄せて、お告げの祈りの時のお話。「心と身体の医者であるイエズスは、救いが万人のためのものであることを示しました。今日でも信仰をもって祈るなら、主は奇跡の癒しを行なってくださるでしょう。しかし、神の摂理は通常、私たちの責任ある態度と適切な医療措置を通じて現われまます。」「病人に対するイエズスの愛は、私たちの心を揺り動かします。病気の時には治療と同様、暖かい心のケアが必要なのですが、残念ながら現代社会では病人はしばしば他者との真の触れ合いをなくしてしまします。」「老人や子供、重度の障害者、死を前にした病人など」

教皇さまの動き

●2・11 ローマを訪れたフィリピン司教団へ。「公益を考える人にとって、社会の心臓である家庭を守ることは何よりも重大な務めです。」第5回世界病者の日のミサで。「病も回心への呼びかけとなり得ます。病を通して、唯一の救いの源であるキリストに絶対の信頼を置くことができますようになります。」

●2・14 教皇庁立生命学会のメンバーを迎えて。「人は受胎の瞬間から人間であり、人間として扱われなければなりません。同じ理由で、胎児の人間としての権利、特に最も大切な生きる権利を尊重しなければなりません。」「人間の尊厳と、生命の始まりから終わりまでに至る全ての人の生きる権利を取り戻すため、決定的な第一歩を踏み出しましょう。死を前にした病人、障害者など、もろく傷つきやすい全ての生命を守らねばなりません。」同日、「福音書を全ての家に」という主旨で、教皇さまは16日に司牧訪問するローマ市内の小教区で、百万冊のマルコ福音書を信者たちにプレゼントすると発表された。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 ■毎月10日発行 ■定価 一部百八十円(送料とも) ■一年予約 送料とも、〇五〇円から。詳しくは精進教育促進協会まで。

郵便振替 01130-8-72393